
アイヌタイムズ 第24号 日本語版

★ ヨモギ

ヨモギの葉をもむと匂いを発します。これを、「カムイ ノヤ kamuy noya 神・ヨモギ」と言うこともあり、「ヌプン ノヤ nupur noya 霊力が強い・ヨモギ」ということもあります。

悪夢を見たときに、ヨモギの茎葉を束ねて、清め草にします。それで体をはらい清めるのです。そうすることを「カ(シ、ーケ)キク ka(sike) kik」といいます。

川上まつ子さんは次のように言っています：
「『ワッカウシカムイ アコシキル wakka-uskamuy a=kosikiru 川の神様の方に振り向く』というトゥス(巫術)は、川に病人を連れて行き、イナウ(木幣)やタクサ(清め

草)やらで、おじいさんが神様に祈りの言葉を言いながら、タクサを持って踊り、イナウを持って踊り、悪い神を追い出すために濡れたタクサで病人を叩いてお祓いし、川にそのタクサを全部流す」。[編註1]

知里幸恵の書いた本「アイヌ神謡集」にヨモギの話が出てきます。オキキリムイの射たヨモギの矢が黒狐の神のえり首に当たって死にました。本には次のように書かれています。

「どうした事か私は頭のさきから足のさきまで、雁皮が燃え縮む様に痛みます。まさか人間の射た小さい矢がこんなに私を苦しめようとは思わなかったのに」

(岩波文庫『アイヌ神謡集』1986年第10刷 p.58-60)

違うカムイユーカラでは、オキキリムイはヨモギの矢でいたずらしたウサギの首領や恐ろしい魔物も殺しました。

「萱野茂のアイヌ語辞典」には次のように書かれています。

「オキクルミ神がアイヌの国土から天の国へ行くときにアイヌの国を守護するために頼んでおいたのが、ヨモギの神なのだ」。

(三省堂『萱野茂のアイヌ語辞典』1996年第1刷 p.365)

「知里真志保 分類アイヌ語辞典」には、こう書かれています：

千歳では、風邪をひいたときに、水にヨモギの葉を入れて、煮立てて蒸気を吸います。風邪ひきさんの頭から着物をかぶらせると、汗をかくので、その風邪がよくなりました。この方法をヤイスマウカラといいます。

中本ムツ子さんは次のように言いました。

「私が手にけがをした時は、母はヨモギの葉を採って手のひらで揉んで、傷の上に貼り、フキの葉をかぶせフキの皮で縛りました」。

青木愛子さんは次のように言いました。

「干しておいたヨモギを煎じて飲んだり、ノヤの根を煎じて飲めば腹痛が止まりました」。

ノヤは日本ではオオヨモギ(キク科)といえます。本州のヨモギより大きいです。

オオヨモギは、北海道、南千島、サハリンに分布します。山に生えます。

日陰でよく乾燥したヨモギの茎葉(けいよう)は、漢方では、艾葉(がいよう)というものです。

艾葉(がいよう)で体を温めます。止血作用もあります。冷えてお腹が痛い時は、これによくします。抗菌作用もあります。

ヨモギは精油を含んでいます。精油には、シネオールや香気の前であるツヨンなどを含まれます。

春先に、ヨモギの若葉を草もちにしたり、もぐさの材料にします。もぐさは灸(きゅう)に使います。

[横山 裕之] 沙流・千歳

【編註1：意訳であり、横山さんからいただいた原文は以下の通り。

「『ワッカウシカムイ アコシキル』っていうトウスは、川さ病人連れて行って、イナウやらタクサやらでエカシはカムイオロイタッしながら、タクサエホリピ イナウエホリピして、その憑きものだか、障りもの離すのに、病人は、今度ベジャベジャになったタクサでカシキッしてもらって、もらえばかたつびし(=かたつぱしに)そのタクサを流して。」]